骨肉の絆

水上 勉

筑摩書房

水上勉

骨肉の絆

筑摩書房

骨肉の絆

一九八〇年三月三〇日第一刷発行

著者　水上　勉

発行者　布川角左衛門

印刷　厚徳社印刷
製本　積信堂製本

発行所　筑摩書房
東京神田小川町二ノ八
振替東京六―四一二三
電話東京(二九一)七六五一(営業)
(二九四)六七一一(編集)

©水上勉
一九八〇

Printed in Japan 0095-81122-4604

骨肉の絆＊目次

一　親子の絆についての断想……3
二　父と子の三十五年ぶりの邂逅……33
三　問われて語る「わが絆」……61
1　母の章……63
2　父の章……79
3　祖母の章……95
4　妻の章……112
5　自分の章……126

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

四　父と母と子の物語・四篇……141
1　小さい橋……143
2　名塩川……159
3　天正の橋……190
4　ひみずっ子……209
母の死……239

骨肉の絆

装画・装幀・カット　渡辺　淳

一　親子の絆についての断想

一

なぜ自分は、こんな家の、こんな父母に生れたのだろう、と思いはじめたのはいつ頃だったか、たぶん、よそのよそ親子が目にうつって、わが家と比べはじめた時だろうと思う。五つだったか。六つだったか。比べる家は六十三軒あった部落の家々であり、そこの親やら子なのである。五つ六つでよその家をよく見たわけでもないが、よその家へゆく用事はあった。私の父は棺桶大工といわれて、埋葬地近くの他人の土地に建った小舎のような家に住んでいた。父の母は盲目だった。私にとって祖母であるが、この人は若くから全盲で、眼が見えないのに、「村あるき」していた。区長の家へ朝早く用事をききにいって、六十三軒をふれ廻るのである。米二俵が祖母の給料だった。私はよく祖母の手びきをした。それでよその家をのぞくことになった。どこの家にも電燈があり、風呂があり、庭には柿やら蜜柑やら、グミがあって、牛や馬もいた。川戸（浅い川につくった炊事場）には魚の骨や、鶏の骨があった。夕方、訪れてゆくと、電燈の下でめしを食う親子の食膳に湯気が立ち、ぷーんと煮物の匂いが鼻をついた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

だが、私の家には、そういう明るい団欒はなかった。先ず電燈がなかった。風呂もなかった。浅い川の川戸もなかった。水は地主の家へもらいにゆくのである。もらい水での炊事だから、風呂まで手がまわらぬのも道理だった。陽がしずむと真っ暗になる家で、五人もの兄弟妹が、ごろごろ、棺桶をつくる父と、下駄直しの上手な母のもとで育ったのだ。私は二ばんめで兄とは二つちがい、一つちがいの弟に弘がいたが、これは早逝、つぎの弟は五つちがいで生れている。まだ、ふたりいた。

父と母はよく喧嘩していた。私が四歳の時に祖母が死んだ。父は外へ仕事に出れるようになり、組にも入って普請にゆくのだったが、給金をもち帰らないので、母はぶつぶつ云い、結局、働き者の母は、地主の家の小作で米や野菜や薪をもらって、私たち五人の子を養育し、実質的な主導権をもつようになった。だが、当時の家は父が家長であった。金をもち帰らぬふしだら男でも、威張っていたのだ。私の父はとりわけ頑固者で理屈いいで、字も書け、弁舌もうまかった。母は反対に字も下手だったし、物言いもまあまあの無口者で、ひたすら働く性格だった。そのため事ごとに衝突したのだ。喧嘩はいつも陰湿だった。時には父が母を撲りつけるのを見たが、ねっちりと母をやりこめることがあった。母は泣いていた。しくしく泣くのである。眼をはらして、子供にかくれてしくしく泣く母を、私は三つごろから何ど見たことか。

母は十六歳で京都に奉公に出て、下駄つくりをおぼえていた。十九歳で帰って、里の父親が財産を失ない、中風になって、村の辻へ出て仁丹を売ったり、下駄の鼻緒を打ったりするのについて廻っていて、父を見染め、結婚することになったらしかった。もちろん、そういう事情を私が知るのはのちのことだが、母は嫁にきた時は、タンスも長持もなく、風呂敷に当座の衣類をつつんできたといっていた。軀一つできた姿は、それはそれで棺桶つくりの父にふさわしい嫁だったろう。私はその母の二十二歳の時の子である。

貧乏なことはそれ自体悪徳だ、といった人がいる。ドスエフスキーも貧乏を憎んだし、河上肇も貧乏の追放を叫んで生涯を閉じた。だが、大正八年三月ごろは私の家と同じような小作百姓の家が日本にはゴマンとあり、三食喰えない親子はザラで、貧乏なために、しなくてもいい夫婦喧嘩や、親子喧嘩をやっていた。喧嘩ばかりしている父母がいると、その喧嘩は子供にもうつって、兄と私はよく喧嘩した。うちの喧嘩は村でも有名で、私は泣きだすと、村じゅうを走りまわって、夕方まで帰らなかった。家へ帰っても、父母がいるわけではない。父は遠出の仕事だし、母はよその田へ出ているから、暗くならぬと帰らない。電燈もない。まっ暗の家へ帰るよりはどこか村の堂とか、友だちの家にいる方がいいのだった。友達の母親は、私に風呂へ入ってゆけといい、時には友達といっしょにめしも喰わせてくれた。そういう家には、電燈

があったので、私はまぶしかった。よその家はゆたかだと思った。だが、そう思っても、そこは、他人の家だからいつまでもおるわけにゆかない。自分には、イヤな家だと思えても生れた家ならそこへ帰らねばならない。よその家の電燈の下でよんだ本のことや、喰ためしや、煮つけの味が、うちのと少しちがっていたことを腹の中で反芻しながら、にくたらしい兄と、しかめつらした父と、泥田を這いまわってきたため、腹をへらしていらだたしげに台所に立っている母の待つ家へのろのろ歩くのであった。

なぜ、自分はこんな家の、こんな親にうまれたのだろう、という思いがやどったのは、たぶんこうした日だった。こういう家といったが、小舎のような家は、土間と板の間があるきり、寒々したもので、座敷六畳はあっても畳はあげられ（盆・正月だけ敷かれた）、子供らの寝る所は変型四畳の板の間とゴザを敷いた土間と板ざかいになったあげ間だった。壁には穴があき、朝早くから、無数の光りの矢が、雨のように顔の上へふりそそいだ。なぜ、父は大工のくせに、破れ家のまま放ったらかしているのか、そういう家に私らを住まわせて、威張っているのも不思議だった。

私が九歳で家を出て、京都の寺へゆくまでの、両親におぼえた絶望に近い反抗心の概要である。誰から入知恵されたわけでもない。私自身が、育てた。

いまはもう、こういう貧困家庭はどこにもないだろう。盲目の祖母は施設に入れられているだろうし、棺桶づくりなども役場が処理してくれるだろうし、「村あるき」などの傭人はいなくて、回覧板が役目を果していよう。もちろん、母が村の辻で直していたような古下駄をはく人もいない。人々はスーパーで買ったクツをはいている。六十年近い前の、大正初期に私があじわった家の貧困ぶりは書けば書くほどよその国の出来ごとのように思えよう。

だが、この貧困な家庭と親の思い出は私にはわすれられないのである。ケシゴムで都合よく消しも出来ぬ、暦の根に、固い雪として凍りついている。このことが、いま私にとって重要である。貧困をのろっていた頃は、よその家と比べて、イヤだった両親でありわが家だが、なつかしいというよりも、いま不思議に光りのようなものを放って私をとらえるのだ。もうしばらく、なぜそんな光りが見えるのか、を分析してみる。

二

先ず盲目の祖母のことだ。彼女はたった四年ぐらいしか、私とともに生きていない。しかも、

私が四つの時の死だから、私がいま瞼にのこしている祖母のくわい髪に朱い玉のついた耳かき兼用のカンザシをさしていたのを見たのは、たぶん道びきを背中に負われてやった二、三歳の記憶だろう。その祖母は、盲目のくせによく縫いものをした。木綿針を指先の腹にくっつけ、糸はしを口でしごいて細くかたくし、針にそわせて、穴へうまく入れ、足袋のつぎ当てをするのだ。縫う時には線の切れた電球に裏返した足袋をはかせ、針で突いてゆくと、針先が電球にすべってうまくいざるのである。盲目の祖母には光る電燈は不要だったが、切れた電球が必要なのだった。私は四歳までこの祖母の裁縫に立ちあっていたから、世の中に切れた電球が、いかに尊いものかを学んだ気がする。友人の家へゆくと、クズ箱に捨ててある電球に、自然と手が走った。世間の人は、私が、電燈もない家にうまれているから、切れた電球に執心した心の裏側をどう見たかしらぬ。が、少しでも大きな電球があれば、祖母の足袋縫いの能率があがるだろうという思いがあって私はそれを拾ったのである。

こういう思いを子供心にもたせた祖母はえらい人だといま思うのである。私はいまも何でもない使った物を捨てる気がせず、のこすくせがあって、物への異常な執着がある。これも祖母がくれたものかと思う。祖母は眼が見えぬから、手にさわったものを拾ってたしかめていた。村の道でも、家の中でも、破れ壁なので、雪がふきこんでくる寝所は、冬はいつもふとんはし

めっていた。このように風のふき込むままに父が放置していたのは、あとで考えると、父の持ち物ではなく、地主の持ち物だった木小舎を、祖父が改造して家にしていたものを、父がうけついで住んでいるからだった。自分がいくら大工だからといってそれを修復しても他人の持ち物になる。地主にとられてしまう馬鹿らしさだったろう。これはごく自然な貧乏人の思いであって、早くどこかへ越すつもりでいた父にとっては、その引越しが思うようにゆかなかったこともあり、しょっちゅう母との争いになったらしかった。この親の事情を子供らは勝手に解釈し、破れ家に永遠に住まねばならぬかといったような思いを抱いて、父をのろったのである。いま六十歳になってふりかえると、風のふきこむ家もオツなものだった、と思う。うちの炉端はよその家より大きな火が燃えていた。というのは、金持の家や、電燈のある家は、火をたきすぎると、電球がすすけるし、衣類もよごれるので、焚き惜しみしていたのだが、うちは、半分は他人の破れ家でもあるし、そこにきれいな衣裳がかかっているわけでもないし、ともっている電球もないのだから煤けて困るものはない。それで、火を大きくたいて、周囲に子供らも父母も座をしめて煖がとれた。火をたくと本がよめる。こういう火を中心にした冬のぬくもりは、電燈のない家だけに、一家の集中度の濃さはどこよりもあって、私ら子供は、物もいわず、一夜じゅう父の焚く火を見ていたり、父がそのわきで細工物をつくったり、塔婆をつくったり、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c